

高橋虫麻呂歌集における題詞について

廣岡 義隆

○キーワード〓 切り継ぎ・阿騎野・菟原処女・宇奈比処女・

勝壮鹿の真間の手児奈

一、はじめに―題詞について―

『萬葉集』において、倭歌以外に、題詞があり、左注が付けられ、時に序が付いている。これ以外に詩や文が掲載されている場合もある。現在見る『萬葉集』はこうして出来上がっている。今、題詞・左注以外は横へ置き、また左注も後補性が濃厚な注記であるのでまずは横へ置く。題詞は、倭歌本文について歌集において重要な位置を占めている。これが無ければ、作者はわからなくなる。どういう時に作られた作であるのかも判然としなくなる場合が多い。そういう意味において「題詞」は歌集において極めて重要な位置を占めている。「題詞」こそは『萬葉集』の編者（各巻の編者）において、編集の力を発揮し得るものであったと言える。

特に、久米常民氏が指摘しているように、口誦歌・誦詠歌の

記録という場合には、このことが際立っていると言うことができるのである。

……一般に「歌集」を編むという仕事は、「言語」に相当する和歌を収録し、それに、題詞を与え、要すれば、左註を書いて、地の文とし、その二つを一緒に、固定させることだといえるだろう。（注1）

ただし、今回取り上げる「高橋蟲麿歌集」（注2）などということになると、既に、誦詠レベルを脱しての「書承」ということになってくる。久米常民氏も『萬葉集の誦詠歌』の第九章において、「誦詠歌からの脱皮」の項目を掲げ、そうした中に「高橋虫麻呂歌集」も挙げている。

題詞・左注に関しては、萬葉研究者の多くによって、少ない発言がなされている。しかし、多いのは題詞における様式・形式論である。題詞様式・題詞形式の論が重要であることは論を俟たず、当稿でも関連してくるものであるが、今回の所論では別の観点から考究する。そうした中で、参考にしてよい考説として次のものが挙げられよう。

橋本達雄氏に、巻九の柿本人麻呂歌集非略体歌について、次の言及がある。

以上の考察によれば、巻九雑歌の非略体歌A（引用者注記、一六八—一七〇九番歌）の季節歌は、一旦は巻十に入れるべく原資料から分離したが、巻十に入れるには題詞を削らなくてはならず、その題詞の中には削ると作者や製作の場や作歌事情がわからなくなるものが多く、そこまで踏み切ることができなかつたので思い直し、だがもとへ戻すことをせず、そのまま無季歌のあとに並べておいたのが、こうした不徹底な形となつて残つたのだと考える。（注3）

また市瀬雅之氏は、次のように指摘する。

巻一の編集をめぐって、〈題詞〉と〈左注〉の基本的な在り方をみてきた。題詞の内容は、巻が編まれる以前Ⅱ歌が記録された当初に施された記述の内容をよく反映していた。巻の編集は、残された記述に必要最小限度の加筆修正を加え、かつ歌の配列を工夫することで形成されている。（注4）

いずれも題詞を考える上で参考となる考説として、まず冒頭に引用した。

二、「バック状」の保存ということについて

『萬葉集』に限らず、古代作品の編集における「バック状」

の保存ということについて、私はあちこちにおいて書き散らして来た。私が、どの論において最初にこのことを書いたのか、私自身判然としないところがある。今、それらを拾い集めると左のようになるうか。漏れこぼれているものがあるかも知れない。

……萬葉集の編纂の多くは、切り継ぎをベースとするものであり、現在我々が考えるような「編集」は余りなされていらないのである（ただし、これは巻によってその様相を異にしている、一様には言えない）。原資料が生状態でバック状に閉じ込められている場合が少なくない。

「黒人の羈旅歌八首」（注5）

……こうした「転記」や「切り継ぎ」の手法は当時において広く用いられたものである。編集に際して現代一般に考えるような細部に手を入れての「編纂作業」が行われなことはなかったが、『萬葉集』の他巻（Ⅱ巻第十六以外の巻）においてもこうした原資料を繋ぐ形で編纂は日常的に行われたものであり、結果、柿本人麻呂や笠金村、高橋虫麻呂、田辺福麻呂などの「歌集」においても、その用字の原態がバック状に保存されているわけであり、一方「高橋氏文」における不統一な表記形態の原由はこうしたことに由来することを見て取らなければならない。

「文末辞・語已辞としての「者」字（一）」（注6）

世に言う「編集」とか「編纂」ということになります。

最後は清書するにしましても、当時は糊と缺で切り貼りするわけです。今、ハサミと申しましたが、昔のことですから、刀子（とうざ）という小刀で切るようになります。このように切り貼りしての編集をします。そこで一つ一つの文字を写すということをしませんが、そのままの文字が『萬葉集』に残ることになります。原資料の文字が『萬葉集』によく残されているということになります。

「額田王の歌の伝来について」(注7)

……当時の編纂というものが、現在一般に考えているような用字統一などの作業ではなくて、主に「切り継ぎ」によったということに由来している。「切り継ぎ」作業によって、元の用字がバック状に保存されることになるのである。これは結果的にそうなったということであるが、その一方には、編者として勝手に手を入れたいという見識も存在したものであろう。かくして、柿本人麻呂の用字も笠金村・高橋虫麻呂・田辺福麻呂の用字も原態に近い姿のまま『萬葉集』に残されたことになったのである。

「初期萬葉の資料について―額田王関係歌稿―」(注8)

右は、編集に際する「バック状」と私が称することについての考察の足跡である。こうしたことは、もちろん私が初めて発言したものではない。古くは、森本治吉氏が指摘しており、また渡瀬昌忠氏や森淳司氏も発言している。まず、森本治吉氏の指摘から、次に抜き出してみる。

巻九が、原本を其儘切り取りし編纂法なる事は、上に挽歌部・相聞部を例として詳記せり。(注9)

巻九程、原本を忠実に記せし巻は無し。…中略…巻九は、原本を其儘切り取りしものの寄せ集めなる事、上に屢述せし所なり。(注10)

また、渡瀬昌忠氏も次のように指摘している。

人麻呂歌集の同じ題詞が雑歌・相聞・挽歌に分出する(「献弓削皇子」歌)「献舍人皇子」歌(「紀伊国作歌」)のは、巻九撰者が原資料をその三部に分けたためと考えられるのであるが、季節に無関心であると共に時代順配列に意を用いた巻九の撰者が同じ雑歌の中でこのような同一題詞の二出三出を許容しているのは、原資料において季節不明歌と季節歌との分類、および季節歌中の春歌・秋歌・冬歌の季節順配列が行われていて、その原資料に忠実に、というよりはそのままに、巻九撰者が切り継いだものと考えざるを得ない。(注11)

森淳司氏は、次のように発言している。

巻九が原資料に忠実で、いわば諸資料の切り継ぎの体をなすとみられることよりすれば、この巻に関するかぎりには、原歌集のそのままの断簡をみせているわけであって、『人麻呂歌集』においても、その原歌集の復元は、まず第一にこの巻九から着手しなければならぬことといえよう。

(注12)

今回、考察する「高橋朝臣蟲麿之歌集」はこうした諸論を踏まえての論究ということになり、以上のことが前提となるものである。

三、題詞の表記と作品内部の関わり

一の「はじめに」において、「題詞」というものは、編者による編纂の最たるものであるということを見た。このことは例えば、次の「柿本人麿作歌」においても確認することが出来るのである。

軽皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 神長柄 神佐備世須
等 太敷為 京乎置而 隠口乃 泊瀬山者 真木立 荒山
道平 石根 禁樹押摩 坂鳥乃 朝越座而 玉限 夕去来
者 三雪落 阿騎乃大野尔 旗須為寸 四能乎押摩 草枕
多日夜取世須 古昔念而 (一・四五)
短歌

阿騎乃野尔 宿旅人 打摩 寐毛宿良目八方 去部念尔

真草苺 荒野者雖有 葉 過去君之 形見跡曾来師 (一・四六)

東 野炎 立所見而 反見為者 月西渡 (一・四七)
(一・四八)

日雙斯 皇子命乃 馬副而 御獨立師斯 時者来向 (一・四九)

この作品における題詞「軽皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌」(軽皇子の安騎野に宿りたまひし時に柿本朝臣人麿呂の作れる歌)は、大きく次の二件を伝えるものである。

1、「軽皇子宿于安騎野時」という作品成立の契機となつた「時」。

2、「柿本朝臣人麿作歌」という作品の作者。

即ち、何時作られたのかという作品成立に関わる「作の時」と「作者」名であり、「1」の「時」には、その内容上、「軽皇子」が「宿于安騎野」という要素を内包している。より分析的には作品の場としての「安騎野」というデータをも内包しているのである。これらの内容は、その倭歌作品(一・四五～四九)の内容と矛盾しないものである。具体的には、主語「軽皇子」について作品内部にその父の「日雙斯皇子命」(注13)(一・四九)が描かれており、「作の場」である「安騎野」ということも作品内部に「阿騎乃大野」(一・四五)、「阿騎乃野」(一・四六)とあり、「宿于安騎野」における「宿」という情況も作品内部に「阿騎乃野尔宿旅人」(一・四六)とあつて整合するものである。題詞が独自に我々に伝えている情報としては、「1」の軽皇子ということと「2」の作品の作者ということになる。編者としては、軽皇子の行旅ということと柿本人麿呂の作という二件は、

当時、何らかの根拠があつて書いていることに違いなく、また現在の我々はそれを信じる以外にはない。

当稿の「二」において、「バック状」の保存ということを書いたが、題詞までもが原資料に存在したものであるのか、そうでは無いか、ということまでは言及し得ないことになる。

右の人麻呂作品について見ると、この作品は「アキノ遊獵歌」などと通称しているが、そのアキノという地名について、作者人麻呂は作品中で「阿騎乃野」（阿騎乃大野）と表記している。人麻呂作歌の作品中に、作者による個性的表記が多々確認されるところから、このように記すものである。用字が「阿」であると共に、当時の常として「野」の上に助詞「乃」を介している。いっぽう、その題詞では「安騎野」とある。これは『萬葉集』巻第一編者の用字であろうという推測が付く。

倭歌という純然たる倭文において助詞「乃」を表記することは何らかしかなことではないが、題詞という漢文体では「乃」を表記し得ないことはある。しかし、用字「阿」と「安」の違いはやはり手（執筆者）の違いに起因するものであろう。

まずは、こうした作品内部のことと、その作品を包み込む題詞ということについて、基本的な認識の押さえをした。

四、高橋連蟲麿歌集における題詞

本題の「高橋連蟲麿歌集」について考察するが、高橋虫麻呂

には、歌集所出歌ではない「作歌」が存在している。

四年申 藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋連蟲麿作哥一首 井短哥 (6・九七二題)

この二首(6・九七一〜九七二)について、原田貞義氏(注14)が、

……それは巻六所収の集中唯一の虫麻呂作歌が、虫麻呂歌集から採録されたものか否かという問題とも関わる。

(二五五頁)
巻六収載の唯一の虫麻呂作歌は歌集所出歌ではないと見るのが穏当である。

(二七三頁)
と結論付けている。この原田貞義氏の結論に従って、この二首(6・九七一〜九七二)は「歌集」以外の資料に依拠した作品と見ておく。

さて、「高橋連蟲麿歌集」ということは、全て「左注」によつて確認される。その左注は次のA〜Eとなる。

- A 右一首高橋連蟲麿之歌中出焉以類載此 (3・三二二左)
- B 右一首高橋連蟲麿之歌中出 (8・一四九七左)
- C 右件歌者高橋連蟲麿歌集中出 (9・一七六〇左)
- D 右二首高橋連蟲麿之歌中出 (9・一七八一左)
- E 右五首高橋連蟲麿之歌集中出 (9・一八一左)
- A・B・Dの「高橋連蟲麿之歌中出」は「歌集」の語が見えず、「歌中出」とのみあるが(Dは次点本系本文による。新点本系本文には「歌集」とある)、これも「歌集」依拠作品であると一般に

理解しているのです、その解釈によっておく。右により、「高橋連蟲曆（之）歌集」が正式呼称ということになる。「之」字がない「高橋連蟲曆歌集」においても読む時には助詞「の」を入れて読んだものと考えられる。その歌集が包む範囲については、論議があること、よく承知している。今は深入りせず、私における結論のみを示しておく。

高橋虫麻呂作品（歌集範囲Ⅱ 作品と歌集範囲が一致する場合）

A Ⅱ 3・三一九〜三二一

B Ⅱ 8・一四九七

C Ⅱ 9・一七二七・一七三八〜一七六〇

(9・一七二六〜一七六〇) (注15)

D Ⅱ 9・一七八〇〜一七八一

E Ⅱ 9・一八〇七〜一八一

さて、この「高橋連蟲曆歌集」における高橋虫麻呂作品とその題詞について、次の作品で見て行こう。

見菟原處女墓歌一首 并短哥

葦屋之 菟名負處女之 八年児之 片生乃時從 小放尔
髮多久麻豆尔 並居 家尔毛不所見 虚木綿乃 牢而座在
者 見而師香跡 悞憤時之 垣廬成 人之詭時 智弩壮士
宇奈比壮士乃 廬八燎 須酒師競 相結婚 為家類時者
焼大刀乃 手穎押祢利 白檀弓 鞞取負而 入水 火尔毛
将入跡 立向 競時尔 吾妹子之 母尔語久 倭文手纏

賤吾之故 大夫之 荒争見者 雖生 應合有哉 穴串呂
黄泉尔将待跡 隱沼乃 下延置而 打歎 妹之去者 血沼
壮士 其夜夢見 取次寸 追去祁礼婆 後有 菟原壮士伊
仰天 叫於良妣 踞地 牙喫建怒而 如己男尔 負而者不
有跡 懸佩之 小釵取佩 冬菽積都良 尋去祁礼婆 親族
共 射埴集 永代尔 標將為跡 遐代尔 語將継常 處女
墓 中尔造置 壮士墓 此方彼方二 造置有 故縁聞而
雖不知 新喪之如毛 哭泣鶴鴨 (9・一八〇九)
反歌

葦屋之 宇奈比處女之 奥柳乎 往来跡見者 哭耳之所泣 (9・一八一〇)
墓上之 木枝靡有 如聞 陳奴壮士尔之 依家良信母 (9・一八一二)
右五首高橋連蟲曆之歌集中出

この作品の題詞「見菟原處女墓歌一首」に見られる「菟原處女」について、これを現在では通常、「うなひ處女」と訓んでいる。長歌の冒頭部に「菟名負處女」とあると共に、第一反歌にも「宇奈比處女」とある。しかしながら、何によって、「菟原」を「うなひ」と訓むことが出来るのであろうか。この題詞の「菟原處女」について、江戸前期の『萬葉拾穂抄』が早くに「ウナイヲトメ」と訓み、その後、この訓み（うなひ）は『萬葉童蒙抄』（荷田信名）、『萬葉集略解』『萬葉集古義』と続く。この間、賀茂真淵の『萬葉考』は「原は名負の二字の草を一字と見たる全き誤りなれば、字をあらたむ」と誤字説を提出し、

本文を「菟名負」と改めて「うなひ」と訓んだ。こうした中にある『萬葉拾穂抄』の次に出た『萬葉代匠記』（初稿本）は「津の國のをとはうはら氏と見えたり……中略……うなひをとことよめるものゝ氏ならん」として「菟原」をウバラと訓んで氏名とし「うなひ」と区別した。『萬葉代匠記』（精撰本）においても「菟原壮士ハウハラヲトコト讀ヘシ」としているのが注意できる。さすが契沖である。しかしながら、『萬葉集略解』は、「菟名日は、此下にも卷十九にも同じ事を宇奈比壮士とも、菟原壮士とも、又は菟會處女とも書たれば、菟原をも宇奈比とよみて、同じく地名也。原を夫とよめば、夫と比と通へる故ならん。」（田邊福麻呂歌集の9・180一番歌条）とその理由を挙げ、『萬葉集古義』は「さて菟原は、和名抄に、攝津國菟原郡宇波良、とあるは、やゝ後の唱にて、古は宇奈比郡とのみ云しなり」（田邊福麻呂歌集の9・180一番歌条）と説明し、その後、澤瀉久孝氏の『萬葉集注釋』（一九六〇年六月）において、「葦屋の菟原處女——中略……和名抄、郡名のとこに「菟原宇波良」とあつて、ウハラといふやうになつたが、ここに「菟名日」とあり、又「菟會」（一八〇二）とも「菟名負」（一八〇九）とも「宇奈比」（一八二〇）ともあつて、もとウナヒと云つた。」（田邊福麻呂歌集の9・180一番歌条）としている。このように「菟原處女」の訓「ウナヒヲトメ」は定着している。

この間、金子元臣氏の『萬葉集評釈』（一九四五年一月）は、「菟名日 ウナヒ。海邊の義。邊をヒといふことは神南備が神

之邊の意であるのと同じ。葦屋の海に沿うた小地稱である。これを郡名の菟原と混一にして、種々の説を立てゝある。……中略……この二語はおのゝ語性の殊なるもので、菟原はもとより茨（ウバラ）の義で、伊勢物語にも「津の國むばらの郡」とある。」（田邊福麻呂歌集の9・180一番歌条）と指摘するが、『金子評釈』第四冊は印刷部数も少なかったということもあつてか、顧慮されることは無かつた。その後、中西進氏『全訳注』（講談社文庫、一九八〇年二月）が題詞「菟原處女」のよみを「うはらのをとめ」とし、脚注で「撰津國に菟原郡がある。その葦屋にいた悲恋の主人公。うなひ処女（うなひ髪）の少女」と通称。とし、その前の180一番歌条では、「ウナヒはウナヒと同じで垂髪の意、八歳ごろの髪でこれを結ぶと適齡に達したことになるから、ごく年少の少女の意だろう。」とする。時代がくだつた『類聚名義抄』においては「髻髪」（親智院本、佛下本三六一）に「ウナヒ」の訓も見られはするが、「童女」の髪（16・383）は「宇奈為」（16・383）であり、「ウナヒ」に「ウナキ」を通わせるのは無理というよりも不可能であり、認め難い。このことは男の名「宇奈比壮士」（長歌第一六句条）にも無理が出る。中西進氏は「下文の如く本来ウハラ壮士というべき。ウナヒ処女が地名の如く考えられてこの称が生じたか。」とする。

さて、本件を整理すると以下のようになる。高橋虫麻呂作品（9・180九〜181）に出る人名呼称は、「智弩壮士」（血沼壮士・陳奴壮士）を今別にする、

菟原處女（題詞）

菟原壯士（長歌第四八句）

菟名負處女（長歌第二句）

宇奈比壯士（長歌第一六句）

宇奈比處女（第一反歌）

となる。「菟原」は二十卷本『倭名類聚鈔』國郡部に「攝津國郡管十三」として「菟原宇波良」とあり（天正本。那波道圓本は「菟原」の字）、國郡部に「菟原郡 芦屋」（高山寺本・名古屋市博物館藏本による。天正本・那波道圓本は「葦原」郷）とある。長歌冒頭には「葦屋之菟名負處女」（長歌第一・二句）と出るが、これは地名が「菟原郡・葦屋郷・菟名負」（大―中―小地名）であることとを明らかにしている。『萬葉集全注』は、第一・二句の【注】に、その見出しを「葦屋の菟原處女」とし、「葦屋（大地名）の菟原（小地名）に住んでいた女性」（金井清一氏『萬葉集全注』巻第九）としているが、これはとんでもない誤認である。『萬葉集』本文の「葦屋之 菟名負處女」の「菟名負」を「菟原」に置き換えているところに誤認の原核がある。

ここで、金井清一氏を槍玉に挙げるつもりはないし、そうしてはいけない。実は『萬葉集』享受の近代における初期の段階から、長歌第一・二句の読み下しや訳において「葦屋の菟原處女」の用字で理解されてきたのである。『萬葉集古義』自体は、題詞の「菟原處女」を「ウナヒヲトメ」と訓んでいるにとどまるのであるが、『萬葉集古義』の訓をベースとした大正期以降

の近代の教養テキスト類各種（注16）においては、長歌第一・二句の読み下し等において、「葦屋の菟原處女」としており、それは各種の文庫類にも及んでいる（中西『全訳注』を除くことは、前出、原文の表記を尊重した文字遣いに行っている武田祐吉氏の角川文庫本においてすら「葦屋の菟原處女」という長歌第一・二句になっているのである。それは注釈書においても、澤瀉久孝氏の『萬葉集新釋』上（一九三二年三月）もしかり、武田祐吉氏『萬葉集新解』中（一九三九年九月）もしかりであり、小学館の日本古典文学全集本『萬葉集』以前に、注釈書の殆どにおいて、そういう本文情況で展開してきていたのである（一々列挙するまでもなく「殆どの注釈書」でそうなっているものであり、例えば日本古典文学大系本『萬葉集』も澤瀉久孝氏の『萬葉集注釈』も例外ではない）。金井清一氏の『萬葉集全注』（巻第九）を槍玉に挙げてはいけなくするのは、実にこういう本文の表記実態があったからである。

さて、この長歌作品における地名展開は、

菟原うはな（大地名、郡）―葦屋あしや（中地名、郷）―菟名負うなひ（小地名、字名）

となることを再確認しておきたい。なお、「菟名負」「宇奈比」とあるウナヒが地名であることについて、言及しておく。当説話において、ヲトメの名としてあるウナヒであるが、これは説話に見られる類型として、その土地の名を負っているものである。古代の女性名については角田文衛氏に『日本の女性名』（注17）の著があり、時代を追っての類型考察があるが、それ以前の問題として、説話に見られる人物名は固有名を超越して、地

名を冠して呼ばれる場合がある。「那賀寒田之郎子・海上安是之嬢子」(『常陸国風土記』香島郡・童子松原奈や「印南別嬢」(『播磨国風土記』加古郡奈などはそうした事例である。ここは男性名にも「宇奈比壮士」(長歌第一六句)とあり、地名を冠した人物呼称であることが判明するのである。長歌第四八句に見える「菟原壮士」は、郡名による呼称であるが、長歌第一六句の「宇奈比壮士」は現地の字名に基づく男の呼称であり、冒頭に名乗りがある「葦屋之 菟名負處女」と同じ字名、即ち同地域の男性であるという意味合いが強い。女性には、長歌に一ヶ所「菟名負處女」(長歌第二句)が出、また第一反歌に一ヶ所「宇奈比處女」の呼称が出る。作品中にはこの二ヶ所にしか出ない。

題詞に出る「菟原處女」の呼称は、作品中には見えないのである。ここに私は、題詞の「菟原處女」の称が、長歌作者の手とは異なるものであろうと見るものである。或いは、「菟名負」や「宇奈比」は倭文としての地名表示であり、郡名「菟原」は漢文としての表示で題詞の表記に適するという見方もあり得ようか。そういう指摘の為に、次の事例を見てみよう。

詠勝鹿真間娘子歌一首 并短哥

鶏鳴 吾妻乃國爾 古昔尔 有家留事登 至今 不絶言来
勝壯鹿乃 真間乃手兒奈我 麻衣尔 青衿着 直佐麻乎
裳者織服而 髮谷母 搔者不梳 履乎谷 不着雖行 錦綾
之 中丹裏有 斎兒毛 妹尔将及哉 望月之 満有面輪二

如花 咲而立有者 夏蟲乃 入火之如 水門入尔 船已具
如久 婦香具礼 人乃言時 幾時毛 不生物呼 何為跡
軟 身乎田名知而 浪音乃 驟湊之 奥津城尔 妹之臥
勢流 遠代尔 有家類事乎 昨日霜 将見我其登毛 所念
可聞 (9・一八〇七)
反歌
勝壯鹿之 真間之井平見者 立平之 水挹家武 手兒名之
所念 (9・一八〇八)

この作品について、題詞に関わる作品内部の表現をしてみると、やはり人物呼称になつてしまふが、左の次第である。

勝鹿真間娘子(題詞)

——
勝壯鹿乃 真間乃手兒奈(長歌第七・八句)
勝壯鹿(反歌) 手兒名(反歌)

この作品においても、長歌第八句で「真間乃手兒奈」、反歌においても「手兒名」としているのに、題詞においては「真間娘子」としている。当例においても「乃・手兒奈」「手兒名」は倭文表記であり、「娘子」は漢文における語として選び取られたものであるという指摘も可能であらう。しかしながら、地名における「勝鹿」と「勝壯鹿」の違いは、同じカツシカを示すものでありながらも、やはり表記者の手の違いとして、明らかとなつて来る。

ではこの「菟原處女」(9・一八〇九題)や「勝鹿真間娘子」

(9・一八〇七題)が『萬葉集』巻第九の編者の手であるかと言
うと、次のような指摘がある。早くに森本治吉氏(注18)が「蟲
麿集に通貫せる三個の特色」として、

一は、年月日を全然記さざる事也。…下略…

二には、「詠」「見」と云ふ形也。…下略…

三に、單に「詠」「歌」とのみ云ひて、歌の上に「作」
の字無し。…下略…

を挙げて指摘し、渡瀬昌忠氏(注19)は次のように指摘する。

「詠」「歌」一首并短歌」の形式の題詞は虫麻呂歌集
特有のものであったと言える。(四七頁)

虫麻呂歌集・金村歌集・福麻呂歌集の所出歌には、例外な
くすべて題詞が有り、しかもその題詞にはそれぞれの特色
があることである。…中略…このことはこれらの歌集の原本
において歌はすべて特色ある題詞を有していたこと、およ
びそれらの題詞がほぼそれぞれの原本のまま万葉集に記載
されたことを、意味する。(六七頁)

以上のような指摘がある。即ち、「菟原處女」(9・一八〇九
題)や「勝鹿真間娘子」(9・一八〇七題)といった表記も「高橋
連蟲麿歌集」のものだという。これは当稿「二」の「バック
状」の保存ということについて「見た事項に齟齬しないもの
であり、その意味において心強い。しかしながら、題詞の表記
と作品内部との相違については、これをどう考えたら良いので
あろうか。考えられるのは次の二案であろう。

①、これらは、高橋虫麻呂自身による題詞の表記ではある
が、書記された時期が歌句本文とは異なることに起因す
る違いである。

②、「高橋連蟲麿歌集」を編集した別人が存在し、題詞の
表記は、その歌集編者による表記である。

今、この二案のいずれが真相に近いのかを私は明らかにする
ことが出来ない。それはさておいて、留意しなければなら
ないのは、それらの題詞は作品内部から隔たったところにあるとい
うことである。ことに「菟原處女」の称は作品内部には無い呼
称となっているのである。

五、おわりに

ここでは俄かな判断を下すのではなくて、歌集の題詞表現と
作品内部の間に或る段差(位相差)が存在しているということを
提示するにとどめておく。

私がいつも指摘していることではあるが、萬葉歌の原文から
離れて、安易な宛字の本文によつて萬葉歌句を理解することは、
作品の原姿から隔たった、とんでもない解釈を下すことになっ
てしまうことである。このことは、『萬葉集』に限ったこ
とではなくて、『古事記』においても、『風土記』においても、
平安朝の各種作品においても、同じことである。原文回帰を今
さらのように申し立てて(注20)、筆を擱く。

【注】

- 1 久米常民氏「万葉集における題詞・左註の意味するもの」(愛知県立女子大学『説林』V号、一九六〇年一月)。同氏『萬葉集の誦詠歌』(塙書房、一九六一年七月。第二章、改稿所収)。引用は、初発稿による。
- 2 「高橋蟲麿」と「高橋虫麻呂」の二様の呼称について、言及しておく。少なくとも古姿を残す次点本系写本においては、「高橋蟲麿」の形で見られるので、原文として示す時には、この「高橋蟲麿」で示した。しかしながら、一般的に示す形においては「高橋虫麻呂」で通用しており、記述文においては「高橋虫麻呂」で示した。なお、合字「麿」と分字「麻呂」とは往時も併用されており、どちらが古姿ということはない。
- 3 橋本達雄氏「万葉集巻九の私家集(二)(一)」「専修国文」六一号、一九九七年八月。引用は、所収書『万葉集の編纂と形成』(笠間書院、二〇〇六年一〇月)二八―二八二頁による。
- 4 市瀬雅之氏『万葉集』巻一の題詞と左注―編纂論の一環として(中央大学『文学部紀要』三三巻、一九九八年三月)。引用は、所収書『万葉集編纂論』(おうふう、二〇〇七年三月)四八頁による。
- 5 廣岡義隆「黒人の羈旅歌八首」(『セミナー』万葉の歌人と作品)第三巻、和泉書院、一九九九年一月。
- 6 廣岡義隆「文末辞・語已辞としての「者」字(一)」(『古事記・日本書紀論究』おうふう、二〇〇二年三月)。
この論中で『高橋氏文』における不統一な表記形態」と記しているが、それについて説明しておく。例えば、『高橋氏文』における「イハガムツカリの命」のカロの用字における「鴈」字と「獨」字の違いがそれである。詳しくは、上代文献を読む会編『高橋氏文注釈』(翰林書房、二〇〇六年三月)の「磐鹿六鴈命」条(廣岡、執筆担当。六二頁)を参照されたいが、それが起因する「二文献の合成点綴」ということについては、同書の「上総國安房浮嶋宮」条(廣岡、執筆。五八―六一頁)において展開している。
- 7 廣岡義隆「額田王の歌の伝来について」(高岡市萬葉歴史館叢書18『額田王』高岡市万葉歴史館、二〇〇六年三月)。
- 8 廣岡義隆「初期萬葉の資料について―額田王関係歌稿―」(上代文学会研究叢書『初期万葉論』笠間書院、二〇〇七年五月)。
- 9 森本治吉氏「萬葉集第九巻考」(『國語と國文學』五卷一二号、一九二八年一月)。
- 10 森本治吉氏「萬葉集第九巻考(二)」(『國語と國文學』五卷一二号、一九二八年二月)。
- 11 渡瀬昌忠氏「人麻呂歌集非略体歌原本の性格―題詞の有無をめぐって―」(『国學院雑誌』六三巻七・八号、一九六二年七・八月)。同氏「柿本人麻呂研究 歌集編上」所収、四二頁。引用は、渡瀬昌忠著作集第三巻『人麻呂歌集非略体歌論上』五〇頁より。
- 12 森淳司氏「卷九人麻呂歌集抄」(『万葉集を学ぶ』第五集、一九七八年六月)、一四二頁。
- 13 「日雙斯皇子命」(ヒナミシノミコの命)は、太陽(天皇)に肩を並べる(並べた)皇子の命という意味の普通名詞的な讚美の呼称ではあるが、例えば『萬葉集釈注』に「草壁皇子だけを取り立ていう称」としているように、草壁皇子に限定された讚辞である。そのみならず、『続日本紀』において、「日並知皇子願之第二子也」(文武天皇即位前記)、「日並知皇子命薨日始入國忌」(慶雲四年四月)、「日並所知皇太子之

嫡子」(元明天皇、慶雲四年七月、宣命第三詔)、「日並知皇子尊之皇女也」(元正天皇即位前紀及び天平元年二月十三日)、「日並知皇子命」(天平宝字二年八月九日、追尊勅条)とあって、限りなく固有名詞に近い形で用いられている。

- 14 原田貞義氏「万葉集の私家集(三)——高橋連虫麻呂歌集の成立時代を中心に」(北海道大学『國語國文研究』四五号、一九七〇年二月)。引用は、同氏『万葉集の編纂資料と成立の研究』(第一章第四節)による。この結論は、同氏の「万葉集の編纂と資料」『萬葉集講座』第一巻、有精堂、一九七三年一月、同氏『万葉集の編纂資料と成立の研究』序章第二節、所収)でも、改めて展開されている。

15 ここでの(括弧)内に示した「歌集範囲」と虫麻呂作について、若干言及しておく。この歌集範囲については、巻第九の左注形式から、当然の結論として「9・一七二六〜一七六〇」が導き出される。これについては、一九七六年一〇月の萬葉学会で発表した。活字化しないままに放置していた私に責があるが、その歌集範囲について同じ結論を伊藤博氏が後に展開した(「歌群の配列——虫麻呂集歌をめぐる——」筑波大学『文藝言語研究』文藝篇一一号、一九八七年一月、同氏『萬葉集の歌群と配列』上、所収)。その後、原田貞義氏が右の伊藤博氏論に拠ったのであろう、一七二六番歌から始まる十二首の歌についても「虫麻呂歌集からの転載歌であった可能性が高い」としている(『万葉集の編纂資料と成立の研究』おうふう、二〇〇二年一月、序章第二節の加筆箇所)。私は、一七二七番歌を高橋虫麻呂の作と見る(一九七六年一〇月発表)ところから、この一首もその作品として掲出した。

- 16 明治廿四年の日本歌學全書版『萬葉集』は原文表示である。この種

の近代テキスト類を揃え持っているわけではないが、私が確認した範囲における初例は大正十一年の土岐善麿編『作者別萬葉全集』である。ただし、この本は長歌を載せず、第一反歌(9・一八一〇)の表記が相当している。長歌における初例は大正十四年の『萬葉集全巻』(古今書院)であろうか。昭和二年の岩波文庫『新訓萬葉集』、昭和三年の有朋堂文庫がこれに次いでいる。精査すれば明治期に遡る可能性があらう。

- 17 角田文衛氏『日本の女性名』(上)(教育社歴史新書、一九八〇年九月)。
18 森本治吉氏の注9に同じ。

19 渡瀬昌忠氏の注11に同じ。同氏『柿本人麻呂研究 歌集編上』三九頁・五九頁。引用は、渡瀬昌忠著作集第三巻『人麻呂歌集非略体歌論上』による。

- 20 廣岡義隆「古典のテキストについて——文学研究におけるテキスト論——」(『三重大学 日本語学』第一七号、二〇〇六年六月)。

* (附記) 当稿の内容は、二〇一二年四月八日の美夫君志会四月例会において、当稿の「三、題詞の表記と作品内部の関わり」及び「四、高橋連虫麻呂歌集における題詞」を中心に発表した。

* (謝辞) 当稿中、「今昔文字鏡」によって示した箇所がある。記して謝意を表したい。

「ひろおか よしたか 本学元教員」